

# 戦時下の東京音楽学校に関する一考察

——朝鮮出身者の学生時代と卒業後をめぐって——

橋本 久美子

## はじめに

本稿は戦時下の東京音楽学校<sup>1</sup>の実態解明の一つとして、朝鮮出身学生に焦点を当て、その実像に迫ることを目的とする。

本稿においては、東京音楽学校と戦争、とくに学徒出陣との関連で、戦時下の範囲を昭和16（1941）年12月の対米英開戦から昭和20（1945）年8月の終戦までとし、その間に在籍した学生を対象とする。昭和16年12月には、昭和17年3月の卒業予定者の卒業式が3ヶ月早めて実施された。これは昭和16年10月に公布された勅令第924号「大学学部ノ在学年限又ハ大学予科、高等学校高等科、専門学校若ハ実業専門学校ノ修業年限ハ当分ノ内夫々六月以内之ヲ短縮スルコトヲ得」による措置で、徴兵年齢に達した卒業生は12月に徴兵検査を受け、合格者は翌年2月に入隊した。昭和17年と翌18年の卒業は6ヶ月早まって9月となり、その直後、在学中の徴集いわゆる「学徒出陣」が始まる。

戦時下の音楽学校の諸規則や演奏活動は『東京芸術大学百年史』にその大要が述べられている。筆者は平成27（2015）年より本学内の該当年代の記録調査や関係者証言を蓄積して「学徒出陣」の実態解明を進めてきた。学生氏名を確認するうち浮上した課題の一つが、戦時下に在籍していた留学生である。留学生のことが課題として認識されたきっかけは、当時の全学生について入隊後の生還を確認していくなかで、消息不明あるいは生還の記録はあっても消息不明の学生がいたことである。その中に朝鮮出身者も含まれていた。彼らはおそらく終戦前に帰郷し、朝鮮戦争を経て各々の活路を求めたものと推測されるが、本学の百年史編集においても特段の調査もなされず歴史に埋もれつつあった。東京音楽学校の留学生については、尾高暁子氏の明治期の中国人留学生に関する研究<sup>2</sup>がある。また金志善氏の研究では在朝鮮日本人音楽家・教師が日本統治下の朝鮮で行った活動<sup>3</sup>が取り上げられるが、戦時下の同校に学んだ朝鮮出身学生にはまだほとんど目を向けられていない。

当時の同校には朝鮮、中華民国、満州、台湾、暹羅（シヤム）出身の学生が学んでいた。朝鮮出身者は外国人留学生ではなく日本人に準じた位置づけであったが、戦時下に在籍した内地以外の学生について、その存在も実態もあまり知られていないのではなかろうか。彼ら

はなぜ音楽を志し、どのような学生生活を過ごしたのか、戦禍を免れたのか、戦後に活躍できたのか。朝鮮出身学生を尋ね、彼らの戦後に日本での経験がどのように生かされたのかを知ることは、音楽学校史と日本近現代史、また日本と韓国<sup>4</sup>の音楽史の一端を照らすことにもつながるのではなからうか。

今回、韓国側資料に基づく情報収集は、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化学専攻修士課程の鄭京和氏に負うところが大きい。戦時下に在籍した学生全体の記録調査には大河内文恵氏と鳥谷部輝彦氏に<sup>5</sup>、戦没者に関する情報収集には卒業生、本学音楽学部同窓会（同声会）、「学徒出陣」で先行研究された西山伸氏（京都大学大学文書館）、折田悦郎氏（九州大学大学文書館）、都倉武之氏（慶應義塾福澤研究センター）ほか情報を蓄積する機関にもご教示いただいた。ここにお礼申し上げる。

以下、1. 戦時下に在籍した朝鮮出身学生の概観、2. 11名のプロフィールの整理、3. 朝鮮出身者の音楽学校時代と戦後についての考察を行う。

## 1. 戦時下に在籍した朝鮮出身者学生

当時の東京音楽学校の学科には、予科、本科、師範科、邦楽科、本科卒業後に進む研究科、甲種師範科、実技のみ学ぶ選科、能楽囃子科、聴講科<sup>6</sup>が置かれていた。ここでは予科、本科、甲種師範科、研究科のいずれかに在籍した朝鮮出身学生11名を入学順に入学時の氏名から記す。典拠史料は後掲の入学、卒業、試験に関する記録である。

	氏名	入学 S/西暦	学科	卒業	生年月日	本籍地	備考
1	朴敏鐘/ 新井敏鐘	S11/ 1936	Vn	S15.3.S17.3 研・修	T7.8.27 (1918)	朝鮮京畿道開城府	管絃楽部員、 授業囑託
2	尹琦善	S13/ 1938	P	S16.12	T10.10.22 (1921)	朝鮮京城府堅志町	
3	白英俊/ 白川英俊	S14/ 1939	Trb	S17.9 S19.9研・修	T7.2.10 (1918)	朝鮮平安北道定州郡	授業囑託
4	李瑚燮/ 木元広哉	S14/ 1939	甲師	S16.12	T7.10.24 (1918)	朝鮮咸南元山府	平 3.1.18 歿
5	朴殷用/ 新井潔	S15/ 1940	声楽	S18.9 研・入	T8.9.11 (1919)	朝鮮慶尚北道金泉郡	
6	金光洙	S15/ 1940	甲師	S17.9	T5.8.25 (1916)	朝鮮黄海道海州府南旭町	
7	山本静治	S16/ 1941	甲師	S18.9	T5.3.1 (1916)	京畿道京城府昌成町	
8	山本錫太郎/ 宋大錫	S16/ 1941	Trp	S19.9	T11.3.8 (1922)	朝鮮江原道華川郡看東面	S18.12 仮卒、 S19.3 兵役、 9.5 入隊
9	金興教	S17/ 1942	Cb	退学	T7.4.10 (1918)	朝鮮慶尚北道大邱府	S18.11.18 病 気退学
10	宮本英男	S18/ 1943	声楽	不詳	T11.8.20 (1922)	朝鮮平安南道安州郡	S18.12.1 入 営
11	松方正好	S18/ 1943	Cl	不詳	T10.9.5 (1921)	朝鮮京畿道開城府	S18.12.1 入 営

朝鮮出身者が最も多く在籍したのは選科であり、選科在籍者によって戦時下学生のさらなる解明につながると期待されるが、下記の理由により、必要な準備調査の後に取り上げたい。在籍者を一覧することが可能な『東京音楽学校一覧』は明治22年から毎年刊行され、各年度の職員生徒が記される。だが昭和15年度の次の『東京音楽学校一覧 自昭和十六年 至昭和十七年』が昭和18年3月で刊行されて最後となる。ここに記載される学生氏名は、昭和16年ではなく昭和17年6月10日現在であり、昭和16年度の正確な把握には他の記録の調査も必要になる。昭和17年6月現在で本籍欄に「朝鮮」と記載ある在籍者は、平山明均、山本一郎、金山乗哲、方村丙龍、新本任儀、金成録（以上、唱歌）、木川勝雄、金光健一、方村丙龍、下卞鐘（以上、ピアノ）、大野隆義、平山學權（以上、ヴァイオリン）、光田永郁（トランペット）の13名であるが、引き続き昭和16年12月現在の在籍者および年度途中の入退学を確認していく。

なお、昭和10年代の朝鮮出身学生は男子のみであったが、その背景は次のように推測される。朝鮮には李氏朝鮮時代の1886年に米国メソジスト派が女子教育塾を設立し、それが1925年に朝鮮総督府より梨花女子専門学校として認可され、女子の教員資格取得を朝鮮で取得する道が開かれたことである。他方、男子が教員資格を得るには、日本の学校で学ぶ以外になかった。当時の男女の教育格差も背景にあろう。台湾、満州、中華民国出身者には少数ながら女子学生も在籍した。

## 2. 11名の学生のプロフィール

プロフィールのおもな基本情報の典拠および略記を記す。（【 】内は略記）

### ◆東京音楽学校側史料

典拠史料のうち刊行物は、該当年度の『東京音楽学校一覧』【一覧】、『東京芸術大学百年史東京音楽学校篇第二巻』【百年史 東音二】、『同 演奏会篇第二巻』【百年史 演二】、それに同声会名簿である。

公文書類は入学願書<sup>7</sup>、授業時間表、学年試験書類、入退学の記録等で、該当年度の記録より在学中の足跡などを抽出した。史料タイトルを下記に示す。

▶【入学関係】『昭和十一年度 豫科入学願書 東京音楽学校』『昭和十三年度 豫科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十三年度 豫科入学願書 東京音楽学校』『昭和十三年度 ピアノ志望者 受験曲名 東京音楽学校教務課』『昭和十四年度 甲種師範科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十四年度 豫科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十四年度 豫科入学願書 東京音楽学校』『昭和十五年度 豫科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十五年度 豫科入学願書 東京音楽学校』『昭和十五年度 甲種師範科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十六年度 豫科入学志願

者受付簿 東京音楽学校教務課『昭和十六年度 豫科入学願書 東京音楽学校』『昭和十六年度 甲種師範科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十六年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校』『昭和十七年度 豫科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十七年度 豫科入学願書 東京音楽学校』『昭和十八年度 豫科入学志願者受付簿 東京音楽学校教務課』『昭和十八年度 豫科入学願書 東京音楽学校』

▶【時間割／時間表】『[予科生徒時間割 昭和13年度]\*』『昭和十三年 時間割 昭和十四年 授業時間表 教務課』『時間表 昭和十三年度 教務課(キタ)』『昭和十六年 時間表 教務課 永久保存』『[時間表] 昭和十七年十月ヨリ変更 教務課』『時間表 自昭和十八年十月 至昭和十九年三月 永久保存』(\*:括弧 [] 内は原本に標題記載がないことを示す)

▶【試業】『昭和十三年 卒業及學年試業成績 東京音楽学校』『昭和十四年 卒業及學年試業成績 東京音楽学校』『昭和十五年 卒業及び學年試業成績 東京音楽学校 三ノ一』『昭和十五年 卒業及び學年試業成績 東京音楽学校 三ノ二』『昭和十五年 三ノ三 卒業及學年試業成績 東京音楽学校』『昭和十六年三月(二ノ一) 入学試業成績 東京音楽学校』『昭和十七年度 入学試業成績 東京音楽学校』『昭和十七年七月 臨時試業成績 東京音楽学校』『[昭和十八年 卒業學年 試業成績]\*』『昭和十八年九月(甲) 卒業學年試業成績 東京音楽学校』『昭和十八年九月 成績(乙)』『昭和十九年 甲、12 昭和十九年 乙1 昭和十九年 乙2 [成績]\*』

▶『昭和十八年 仮卒業証書登録簿 東京音楽学校』『昭和十三年度以降 入退學願書 研究科』『[昭和20年～昭和25年]\* 本校退學願書類』『退學願綴(除籍)[昭和19年～昭和27年]\*』『自昭和十三年21年迄\* 甲師入退學許可簿 教務課』(\*「21年迄」は朱字)

◆韓国側史料 (【 】内は略記)

▶韓国学中央研究院デジタル版『韓国民族文化大百科事典』(encykorea.aks.ac.kr)【大百科】

▶『朝鮮総督府職員録』(国史編纂委員会韓国史データベース:(db.history.go.kr)【職員録】

▶韓国芸術総合学校韓国芸術史研究所編『한국 작곡가 사전(韓国作曲家辞典)』(ソウル:時空社、1999年)【作曲家辞典】▶韓相宇著『記憶したい先駆者たち』(京畿道坡州市:知識産業社、2003年)【先駆者】▶宋芳松『한겨레음악인대사전(ハンギョレ音楽人大辞典)』(京畿道坡州市:BOGOSA、2012年)【ハンギョレ】▶大韓民国藝術院 The National Academy of Arts, Republic of Korea オフィシャルサイト(<http://www.naa.go.kr/site/main/home>)【藝術院】▶ソウル大学校中央図書館 (<http://library.snu.ac.kr/>)【図書館】▶韓国語 wiki 文献 (<https://ko.wikisource.org/wiki/>)【wiki】

以下、各人の戦後の日本以外での活動歴に関しては西暦のみとし、それ以外は和暦・西暦の併記を基本とする。ただし同一段落内で同年や翌年の場合は適宜省略する。

(1) 朴敏鐘／新井敏鐘 박민종 (パク・ミンジョン) (1919-2006)

入学願書の記載によれば、大正7(1918)年8月27日開城に生まれる。本籍地は朝鮮京畿道開城府(現在の北朝鮮内)である。昭和6(1931)年3月開城第一公立普通学校第6学年を卒業し、4月京城第一公立高等普通学校に入学、昭和11(1936)年3月京城第一公立高等普通学校第5学年卒業見込、4月東京音楽学校予科に入学(ヴァイオリン)、昭和15(1940)年3月本科を卒業し、研究科入学、昭和17(1942)年3月研究科を修了した。

朴敏鐘は本科2年に管絃楽部員(第二ヴァイオリン)となり、在学中の定期演奏会にも度々出演した。【百年史 演二】<sup>8</sup>によれば、昭和13(1938)年6月25日の第84回定期演奏会ではフェルマー指揮によりクナープ A.Knab のアルト独唱と絃楽合奏のための《マリア古潭》(本邦初演)、ブラームスのアルト独唱・男声合唱・管絃楽《ラブソディー》作品53、ベートーヴェン《交響曲第2番》全楽章など。昭和13(1938)年2月12日、第105回学友会演奏会ではヘンデル《ソナタ》イ長調を大島正泰の伴奏により演奏。昭和14(1939)年12月17日、学友会第121回洋楽演奏会ではタルティーニ《奏鳴曲ト長調》を川口輕六の伴奏で。昭和15(1940)年3月26日の卒業式ではヴェラチーニ《奏鳴曲ホ短調》。昭和17(1942)年5月2日の研究科聴講生修了演奏会では新井敏鐘の名でブルッフ《協奏曲》。昭和18(1943)年2月6日の第143回報国団演奏会では授業囑託となり、モーツァルト《六重奏》KV.287の第一ヴァイオリンを演奏した。

朴が本科2年で管絃楽部員となったのはそれだけ力量を認められてのことであろう。研究科在学中に、朴から新井に改名した。朴へのインタビュー記録「バイオリニスト朴敏鐘」が2014年6月29日にインターネット上に公開されている<sup>9</sup>。そこで朴の語るところでは、エルマンやクライスラーに憧れ、イ・ヨンセ(李永世 이영세)にヴァイオリンを学び、昭和11(1936)年の高等普通学校卒業までにコンクールで優勝、東京音楽学校でモギレフキーに師事し、奨学賞を受けて卒業した。

その後の朴は、韓国側【大百科】によれば、一年間東京音楽学校の講師として任用され昭和18(1943)年に帰国し、昭和20(1945)年まで開城好壽敦女子高等学校教員をつとめた。帰国の時期は不詳だが、昭和13(1938)年から同18年12月まで東京音楽学校の教務囑託兼管絃楽部員であり、同18(1943)年9月10日から13日にかけて行われた新潟・長岡への演奏旅行(後述)にも囑託として参加したことから、同年の帰国とすれば秋以降であろう。昭和18(1943)年発行の同声会名簿に赤ペンで「開城明德高女」と勤務先が書かれている。これは上掲韓国側情報にある女子高等学校の前身の名称である。1945年、梨花女子大音楽大学教授、1946年からソウル大学校芸術大学音楽部教授となり、1950年から51年の朝鮮戦争の際には韓国海軍音楽隊楽長をつとめ、1952年パリ国立音楽院に留学し1954年ディプロム取得、1953年から61年にはオーケストラ“S de Paris”団員、1961年に米国ニューヨークのタウンホールでリサイタルを行う。62年から63年パリ“CONCERT PARDELOUP”、63

年パリのコロンス管弦楽団、1964年から71年慶喜熙大学校音楽大学教授、同学長、また1964年から70年には西ドイツのオーケストラ団員としても活躍、1970年9月に帰国した。1972年から83年ソウル大学校音楽大学器楽科教授、80年から83年同大学学長となり定年退任、83年名誉教授となる。1983年には女性門下による室内楽団 Camerata Madri を編成し団長兼指揮者となる。楽団は2013年に創立30周年記念演奏会を行った。作品に《ヴァイオリンとピアノのための組曲》第1番・第2番(1976)、《Sonatine (Duo) Pour Violon et Violoncello (ou Alto)》(1982)など。韓国の音楽学会会長、KBS交響楽団運営委員長などを歴任、大韓民国芸術賞(大韓民国政府1980年)、文化勲章(大韓民国政府1987年)、国民音楽賞(音楽評論家協会1993年)叙勲。

昭和18(1943)年2月、当時の乗杉嘉壽校長が朴敏鐘(改名後は新井)の結婚に贈った祝辞が残されている。「此度新井敏鐘君には御良縁を得て本日茲に華燭の盛典を挙げられ御両人が幾久敷堅き契を結ばれ琴瑟愈相和せられ以て御一門の御繁栄を将来せらるゝことは洵に御日出度衷心よりお慶び申し上げます。君は夙に諸文化中最も至難なる音楽に志して東京音楽学校に学び、曩に優秀なる成績を以て卒業せられ既に選ばれて母校に職を奉じ大東亜共栄圏文化工作の上に重要な役割を果すべき音楽文化の戦士として最も将来を嘱望されている前途有為の青年です」と紹介し、「御両人の新家庭より盛上る清新なる生命力は、あらゆる難関を突破克服して輝かしき前途を開拓されることとせう。すべての試練に堪へるこそ無情の喜びであり誇りでなければなりません。況んや今日の家庭はもはや単なる家庭ではなく、道義国家の至上命法を発現すべき地盤であり湧泉たる所に家庭の新たなる深奥なる意義が存するのであります。希くは深く思ひを茲に致されて国家総力遂行の一翼として益々御修養を積まれ新家庭の幸福と御一門の御繁栄を切望して止みません」<sup>10</sup>。新家庭は国家の地盤・湧泉となり、国家総力遂行の一翼となることが期待されたのである。

昭和18(1943)年9月に新井(朴)敏鐘が参加した演奏旅行は、山本元帥讃仰演奏会である<sup>11</sup>。この演奏旅行には、職員27名、生徒109名(男子53、女子55)の計135名が参加し、演奏や生徒の監督に関わる教員も名を連ねている。橋本國彦は自作《英霊讃歌》等の指揮、藤井典明はその独唱、小澤弘、岡田二郎、永田晴、小林安八、北爪利世らは管絃楽を担当する。女性教員は演奏と女生徒の監督引率でもあろう。新井敏鐘、白川英俊の名前もある。白川は後述する「白英俊」である。男子生徒は予科と本科で30名、師範科3年生23名、計53名である。やがて戦禍に斃れる卒業直前の葛原守、草川宏、東風平恵位、本科2年の山崎孟、同1年の鬼頭恭一も参加していた。

## (2) 尹琦善 윤기선 (ユン・キソン) (1921-2013 アメリカ、ロサンゼルス)

入学願書によれば、大正10(1921)年10月22日生まれ。本籍地は朝鮮京城府(現在の韓国、ソウル特別市)。昭和13(1938)年京城第一公立高等普通学校第4学年修了。【一覧】

により、昭和13(1938)年東京音楽学校予科入学(ピアノ)、昭和16(1941)年12月卒業、昭和17(1942)年研究科入学と確認できる。【wiki】によれば、高等普通学校在学中に朝鮮日報社主催の第1回音楽コンクールに出場してピアノ部門で優勝し、以後第4回まで連続1位となったという。

東京音楽学校予科の受験曲として、ほとんどの受験生が1曲のみ提出しているのに対し、尹が「モーツァルト ソナタ ヘ長調 ケッヘル番号第280番」「ベートーヴェン ソナタ ハ短調 作品10番、1番」「バッハ プレリューディオとフーガ ニ短調 第一編 第6番」の3曲を届け出ているのが目を引く(【願書】による)。【試業】の昭和13年学年試験の記録より、予科卒業試験に、ベートーヴェンのソナタ・ハ長調を演奏したことが、また同年の【時間割】より担当教員は永井進であったとわかる。在学中の演奏会出演記録は【百年史 演二】より、以下判明する。昭和15(1940)年6月16日、学友会第124回洋楽演奏会でグリーグ《ピアノ協奏曲》の第二、第三楽章を当時の担当教員・井口基成教授の第二ピアノとともに重奏。昭和15(1940)年12月14日の学友会第128回洋楽演奏会では同級生の金石幸夫の(コルネット)によるアーバン(J.B.Arban)作曲《ベニスのカーナヴァル変奏曲》の伴奏。昭和16(1941)年6月7日の第131回報国団演奏会では1年後輩の河野俊達によるヘンデル《ヴァイオリン奏鳴曲》第4番の伴奏、同じ演奏会で、1年後輩の岩崎常治郎によるグノーとヴェルディのオペラ・アリアの伴奏。昭和16(1941)年12月26日の自身の卒業式ではブラームス《ソナタ》ヘ短調・作品5、第1楽章を演奏した。

昭和18(1943)年度同声会員名簿原簿に「尹琦善」の横に赤インクで「伊東基」と書き添えられ、住所は朝鮮京城府にあった。音楽学校では尹琦善として知られていたが、改名届を出していたのだろうか。

【wiki】によれば1944年の帰国直後、京城府民館でキム・スンナム(金順男)らと帰国デビュー・リサイタルを開き、妹のユン・ボヒとのピアノ・デュエットも行った。日本の敗戦後にはキム・スンナム、イ・ゴンウ、ナムゲン・ヨソル、ムン・ハクジュン(文学俊)、イ・インヒョンらとともに音楽家の団体「音楽家の家」に参加して室内楽に尽力、プロレタリア音楽同盟の器楽部長となる。【ハンギョレ】によれば、朝鮮音楽家同盟にも加入してチョン・ヒソク、チョ・ニョム(조남 趙念)、イ・ガンリョルと弦楽四重奏団を結成した。戦後<sup>12</sup>渡米し1948年6月にハワイで演奏を行い、ジュリアード音楽院に入学。1949年12月にニューヨークで演奏会を開き、卒業後もしばらく米国に留まり帰国。ソウル芸術高校教授、延世大学音楽学部教授、ソウル大学校音楽学部教授を歴任、1980年代に再びロサンゼルスに移り「ソウルトリオ」を結成して室内楽で活躍した。

韓国で1960年代から90年代まで演奏活動を行い、1968年8月20日にKBS交響楽団と協演、1971年4月6日に市民会館でリサイタル、11月16日「三楽聖連続演奏会」に出演、1974年11月21日にはソウル大学校四重奏団の演奏会に出演した。1975年4月16日、柳

寛順記念館で「ピアノ協奏曲の夜」を開催。5月15日、KBS交響楽団の第135回定期演奏会、6月27日には延世交響楽団に出演した。1980年第5回大韓民国音楽祭でKBS交響楽団と、1993年10月8日ソウル市響定期演奏会でも協演した。2005年10月、第3回韓仁河ピアノ賞を85歳で受賞、韓国で記念演奏を行う (<http://yunposun.com/tech72/board.php?board=notice&page=3&sort=hit&command=body&no=134>「東亜日報2005.10.27」[2019/8/29現在])。2013年7月27日、ロサンゼルスで自宅で死去した。尹の後輩<sup>13</sup>も彼のことを「朝鮮出身で優秀な」人物として覚えていた。

### (3) 白英俊／白川英俊 백영준 (ベク・ヨンジュン) (1918-?)

入学願書によれば、大正7(1918)年2月10日生まれ。本籍地は朝鮮平安北道定州郡(現在の北朝鮮内)。昭和5(1930)年奉天省の中華民国市立第一小学校を卒業し、朝鮮平安北道宣川邑川南洞明信小学校5年編入、同7(1932)年3月卒業、宣川邑川北洞聖中学校入学、同10(1935)年7月退学し9月東京市淀橋区下落合目白商業学校に編入、同12(1937)年3月卒業。ピアノを同10(1935)年9月から岡崎きよ、弘田龍太郎、声楽を12年4月より中村淑子に師事。独学のトロンボーンを専攻楽器として、昭和14(1939)年東京音楽学校予科入学。【時間表】から萩原英一が担当教員と判明した。昭和17(1942)年9月卒業。昭和19(1944)年9月研究科修了。

同校の演奏会の出演記録を【百年史 演二】で追う。昭和16(1941)年6月7日の第131回報国団演奏会においてプーランク《トラムベット、ホルン、トロンボーンのための奏鳴曲》を金石幸夫(Tp)、岡田朗(Hr)、白英俊(Tb)で演奏した。昭和17(1942)年8月5日から28日にかけて行われた満州建国十周年慶祝演奏旅行では、中田一次作曲、独奏トロンボーンと小管絃楽《祝宴》を中田指揮のもと独奏した。当演奏会は昭和17(1942)年8月24日付「京城日報」3面に「絢爛・初秋を飾る音楽の祭典へ—本社招聘—東京音楽学校大演奏会」の見出しで取り上げられた。白の前には新井敏鐘が渡邊暁雄指揮モーツァルト《ヴァイオリン協奏曲第4番》ニ長調第1楽章を演奏した。(ftp://210.101.116.19/kyungsung\_New/1942-08-20.pdf[20190826現在])。白は昭和17(1942)年9月25日の卒業演奏会でリーヴェ《小協奏曲》を演奏し、翌18(1943)年9月、山本元帥讃仰演奏会に職員・白川英俊として参加した。

【ハンギョレ】にトロンボーン演奏家として記載され、1946年に国立ソウル大学校が設立された際、芸術学部音楽部の最初期の教授であった。高麗交響協会会員。

### (4) 李瑚燮<sup>14</sup>(木元広哉／木元宏哉) 이호섭 (イ・ホソプ) (1918-1991)

韓国ではピアニスト、作曲家として知られる。入学願書によれば、大正7(1918)年10月24日、本籍地と同じ朝鮮咸南元山府(現在の北朝鮮内)に生まれる。昭和13年3月朝鮮

元山公立商業学校を卒業。ピアノを10年2月より李興烈、檜崎八十二、土川正浩に師事し、昭和14年東京音楽学校甲種師範科に入学。昭和15年11月25日、木元広哉と改姓<sup>15</sup>。甲種師範科のため演奏会の出演記録はないが、当時の合唱は本科と師範科の合同で行われ、入学翌年が紀元2600年であることから、信時潔の《海道東征》の練習が始まったときから参加し、初演メンバーとなった可能性が高い。昭和16年度の時間表によれば声楽を橋本秀次に師事した。昭和18年の同声会員名簿には「木元広哉」の名前と勤務先「朝鮮清州師」が記載される。【wiki】によれば1941年東京音楽学校卒業後、朝鮮清州師範学校教諭（音楽）の辞令を受け奉職。現在の韓国の国立清州教育大学校である。

【ハンギョレ】によれば1953年7月朝鮮戦争休戦後、ソウルの首都女子師範大学（世宗大学校の前身）の音楽科教授に着任、1975年退任。淑明女子大学校、ソウル大学校等の講師も務めた。平成25年度同声会名簿の物故者欄に「李瑚燮（木元宏哉）平成3.1.18」と記載されている。作品の出版および演奏は下記の通り。1960年代に『李瑚燮歌曲集』を出版。1969年、歌曲《ピリ（笛）》を第1回ソウル音楽祭に出品。1975年5月27日ソウルの明洞藝術劇場で李瑚燮歌曲発表会。『李瑚燮歌曲集1940 - 1962』『李瑚燮歌曲選集1945 - 1975』『李瑚燮芸術歌曲集1975』『李瑚燮、童謡曲集』を出版。著書に『現代ピアノ独奏法』がある。李瑚燮の歌曲の数曲は現在 You Tube でも聴くことができる。

#### (5) 朴殷用（朴銀用／新井潔） 박은용（パク・ウンヨン）（1919-1985）

入学願書によれば、大正8（1919）年9月11日生まれ。本籍地は慶尚北道金泉郡（大韓国内）。大正15年4月金泉郡開寧公立普通学校に入学、昭和7年に卒業し、京城中学校公民学校入学、昭和13年3月卒業し、9月東京市錦城中学校第4学年に編入、14年4月武蔵野音楽学校予科に入学し、鯨井孝、藺田誠一に声楽、伊東章子にピアノを師事、翌15年4月東京音楽学校予科に入学。本科で声楽部に進みヴァーハーペニヒに師事した。

新井潔の演奏会出演を【百年史 演二】でたどると、本科2年の昭和17年10月24日、第139回報国団演奏会にてテノール独唱として、同級生の中田喜直の伴奏で、ヴォルフ《沈黙の愛》、レーヴェ《詩人トム》、山田耕筰《唄》を演奏した。翌18年9月23日の卒業演奏の曲目は中田一次《曲浦吟》、シュトラウス《子守唄》《ひそやかなる誘ひ》であった。作曲部の同期・草川宏は自作歌曲の批評を彼に求めた。新井は辛口ながら率直に批評し、草川は「新井さん」の言葉を日記に書き留めた。4歳年長で音楽にも人生にも経験を積んだ新井は、一目置かれる存在であったのだろう。新井と草川は、本科卒業直前の昭和18（1943）年9月の長岡、新潟での山本元帥讃仰演奏会にも参加していた。

卒業後は声楽家・評論家・作曲家として活動する。昭和18年発行の同声会名簿に「新井潔、T（テノール）、梨花高女」と赤ペンで記入される。帰郷後に届けられたのであろう。韓国側資料に梨花女子高校の教師であった1946年9月、自由新聞社撰、朴殷用作曲「全国中等

学校野球選手権大会々歌」が合唱されたとあるが、これは年代的にも辻褄が合う (<http://www.osen.co.kr//article/G1109585011> [20190826 現在])。1946年ソウル大学校音楽学部教授に着任、リサイタルを2度開く。音楽団体「音楽家の家」で金順男<sup>16</sup> (キム・スンナム 1917-1986、作曲家、東京高等音楽院卒業)、鄭勳謀<sup>17</sup> (ジョン・フンモ 1909-1978、ソプラノ、東京高等音楽学院・帝国音楽学院卒業、1953年ソウル大学校音楽大学教授)、金興教 (キム・フンギョ 1918-1995、コントラバス奏者、本項「9」参照)と活動。1948年8月の韓国政府樹立に伴い越北。朝鮮戦争が勃発した1950年、朝鮮人民軍協奏団声楽家、声楽指導員、協奏団芸術副団長を務める。1953年より朝鮮音楽家同盟中央委員会評論分科委員長、朝鮮民族芸術研究所室長、民族音楽研究所室長、平壤音楽研究所室長を歴任、評論多数、『朝鮮民族謡曲集』を編纂。国家勲章2級を受章した。民謡の調性理論を体系化した音楽学者としても知られ、作品に交響曲、バイオリン小曲、歌曲《忠誠歌》など。

東京音楽学校時代、朴殷用のその後の活躍を予感させる文章がある。彼が本科2年の昭和17(1942)年は満州建国十周年にあたり、同校は約140名からなる慶祝演奏団を編成し、8月5日から30日まで満州旅行を行った。演奏団の一人であった新井潔の「慶祝音楽使節団報告記」が『音楽公論』昭和17年10月号、79～90頁、同11月号、66～74頁にわたり掲載された。出発から旅順、大連、新京、ハルビン、奉天、平壤、京城まで計24回の演奏会をこなし、26日に一行と離れて京城に残り釜山行き列車を見送るまで、教師や学友との旅程が臨場感と描写力をもって語られる。本番を控えても《海道東征》が上達しない理由を分析し、平壤では姉の前で演奏し、学友に朝鮮服の美しさを褒められ「無上に嬉しかった」<sup>18</sup>。戦時下の社会通念や彼の心情を理解することは今日では難しい。戦後の動乱期における彼の身の処し方も然りであるが、東京音楽学校時代の朴は、日本人以上に日本人であることを意識し、朝鮮民族の誇りも失わず、戦時下の日本と朝鮮を実感し生きた一人だったと言えるのではなかろうか。

#### (6) 金光洙<sup>19</sup> (原光) 김광수 (キム・グァンス) (1916-?)

入学願書によれば、大正5(1916)年8月25日生まれ。本籍地は朝鮮黄海道海州府(現在の北朝鮮内)。昭和5(1930)年4月海州東公立中学校に入学、同12(1937)年3月卒業。同4月より来城公立尋常小学校嘱託教員、同13(1938)年12月判任官十級俸。昭和15(1940)年4月東京音楽学校甲種師範科入学。同年11月25日、「原光」と改姓<sup>20</sup>。昭和16年(2年生)の教員の学生担当表(【時間表】)によれば、ピアノを水谷達夫、声楽を橋本秀次に師事した。昭和17(1942)年9月25日卒業。金が入学した昭和15(1940)年は《海道東征》が発表された年である。彼もおそらく入学した年から卒業まで繰り返し合唱練習に参加していたことであろう。

昭和18(1943)年12月の同声会名簿に「原光 京城進明高女」と印刷されることから、

東京音楽学校を昭和 17 (1942) 年 9 月に卒業して帰国し、京城の高等女学校に奉職したとみられる。私立進明高等女学校は現在の進明女子高校である。彼が戦後も教員を続けたか不詳であるが、ハングル表記 (김광우) からさらに情報収集する余地はあろう。

(7) 山本 静治 김형근 (金炯瑾) (キム・ヒョングン) (1916-1982)

山本は受験前に日本名に改名していたため、在学中の記載のすべてが山本であったが、受験のさいの京城師範学校演習科からの「薦挙書」に「山本静治 (旧姓名 金炯瑾)」と記載されていたことから改名前の名前が明らかになった。

入学願書によれば、大正 5 (1916) 年 3 月 1 日、黄海道平山郡 (北朝鮮内) に生まれる。本籍地は京畿道京城府 (現在の大韓民国、ソウル特別市)。昭和 5 (1930) 年 4 月京城師範学校に入学、同 11 (1936) 年 3 月卒業、同 12 (1937) 年 4 月より翌年 2 月横井榮一郎にピアノと唱歌を学び、昭和 14 (1939) 年 4 月より平山孝志に唱歌とピアノを学ぶ。受験当時は平山郡金岩公立尋常小学校訓導であった。

【職員録】に、1936 年、金炯瑾・平壤南山普通学校・訓導、1937 年、金炯瑾・平壤南山普通学校・訓導、1938 年、金炯瑾・黄海道金岩尋常小学校・嘱託、1939 年、金炯瑾・黄海道金岩尋常小学校・訓導、1940 年、山本静治・黄海道金岩尋常小学校・訓導、とある。

昭和 16 (1941) 年 4 月東京音楽学校甲種師範科に入学。藤井典明に声楽、萩原英一にピアノを師事したことが【時間表】より判明。昭和 18 (1943) 年 9 月卒業した。昭和 18 年 9 月の山本元帥讃仰演奏会にも参加している。甲種師範科の学生では珍しく、昭和 18 年 7 月 4 日の第 146 回報国団演奏会に本科生とともにピアノ独奏で出演し、ショパン《ポロネーズ》変イ短調作品 53 を演奏した。韓国では金炯瑾はピアニスト、作曲家として知られ、1946 年 8 月ソウル大学校芸術大学音楽部が開設された際の教授陣の一人であった。1948 年に韓国政府が樹立されると、ハングル音楽用語制定委員会のメンバーとなり、韓国最初の音楽理論書『中等音楽通論』をはじめ、『音楽通論』『高等音楽通論』『新しい中学音楽』『高等音楽教本』『新しい音楽』などの理論書や教育書を著した。朝鮮戦争休戦協定までソウル大学校の教員、1953 年 7 月休戦協定直後に大邱暁星女子大学および淑明女子大学の教員を兼任。1955 年 - 1958 年、スイスに留学しチューリヒ音楽院ピアノ演奏大学院課程でエッガー (M. Egger)、フィッシャー (E. Fisher) に師事。1958 年帰国し釜山でリサイタルを開く。1962 年よりソウル首都女子師範大学 (現・世宗大学校) の音楽科教授。ドビュッシーのピアノ曲の韓国初演を行う (【職員録】及び「中央日報」2005 年 3 月 1 日付より)。不安定な朝鮮半島情勢にあっても演奏家として成功し、韓国の音楽教育界に貢献した様子が窺えよう。

(8) 金興教 김흥교 (キム・フンギョ) (1918-1995<sup>21</sup>)

入学願書によれば、大正 7 (1918) 年 4 月 10 日慶尚北道大邱生まれ (大韓国内)。大正

13 (1924) 年4月慶尚北道大邱公立徳山小学校に入学、昭和6 (1931) 年3月卒業、4月京城徽文中学校に入学、昭和13 (1938) 年4月卒業。昭和15 (1940) 年より柏木俊夫にピアノ、音楽理論、唱歌を学ぶ。昭和16 (1941) 年10月東京音楽学校選科に入学、深海善次にコントラバスを師事。昭和17 (1942) 年4月、東京音楽学校予科入学、昭和18 (1943) 年4月本科に進みコントラバスを専攻するが、11月18日、病気のため退学。コントラバスを長汐壽治、作曲と指揮法を橋本國彦、ピアノを田中規矩士に師事。病気退学とともに日本での記録は途切れるが、【wiki】によれば韓国ではコントラバス奏者、作曲家として知られる。1945年9月に米軍政庁が発足し、高麗交響協会 (1945. 9.15 結成、1948年10月解団) の創立委員、コントラバス奏者となる。同年12月に設立された京城音楽専門学校にてコントラバスと室内楽を指導。1946年8月には京城音楽専門学校がソウル大学校芸術大学音楽部となり、コントラバスの専任講師となる。朝鮮戦争 (1950. 6月 - 1953. 7月) の際、ソウル大学校音楽大学の生徒30余名からなる空軍音楽隊の隊長、空軍軍楽隊の初代協奏指導教官に就任。休戦後、故郷・大邱の暁星女子大学の音楽科長、ソウル大学校音楽大学の専任講師。1959年ソウル大学校音楽大学の国楽科助教授、教授となり1983年8月定年退任。1983年8月31日、大韓民国文化勳章 (大統領章) <国民勳章牡丹章> を受賞。『教授任用関係著述集: ソウル大学校 金興教: 管絃打楽器のための二章、外1篇』 (ソウル: ソウル大学校、発行年不明)、著書に『国楽記譜法の新しい試み』 (ソウル: ソウル大学校音楽大学、発行年不明)、『丘南金興教作品集』 (ソウル: 図書出版スムダン、1996) など。作品は1960年代から70年代にかけての新国楽が中心で《管・弦・打楽器のための2章》 (1966)、《伽耶琴とチャングのための3章》 (1968)、《短簫と洋琴のための小曲》 (1972)、打楽器合奏曲《田舎市場の寸劇》 (1976)、《郷ピリとチャングのための二重奏》 (1977)、《奚琴とチャングのための隨想》 (1978) など (【作曲家辞典】【先駆者】【wiki】)。金は東京音楽学校入学前から修得した演奏、理論、作曲法を生かし、韓国で要職に就いた様子が窺える。

#### (9) 山本 錫太郎 (シャクタロウ) / 宋大錫 송대석 (ソン・デソク) (1922-?)

入学願書によれば大正11 (1922) 年3月8日生まれ。本籍地は朝鮮江原道華川郡 (大韓国内)。昭和5 (1930) 年4月、華南公立尋常小学校に入学し、昭和9 (1934) 年に卒業し春川公立中学校に進学。同15 (1940) 年卒業。同年4月から16 (1941) 年1月まで東京高等音楽学院 (現・国立音楽大学) に在籍し、ハタノ・オーケストラのホルン/コルネット奏者・中村鉦次郎にトランペットを師事。昭和16 (1941) 年東京音楽学校予科入学。トランペット専攻。昭和18 (1943) 年12月15日に兵役のため仮卒業となり休学。卒業演奏会も行われず、卒業の頃について情報が乏しい。東京音楽学校の「昭和十八年仮卒業証書登録簿」に「本科第二学年 仮卒業証書 昭和十九年五月十七日入隊ノタメ下付 朝鮮江原道 山本錫太郎 大正十一年三月八日生」と記載されるが、実際に入隊したかどうかは不詳。昭和18 (1943)

年の仮卒業とは別に、あらためて翌19(1944)年9月に卒業し、昭和24(1949)年4月同声会発行の「東京音楽学校卒業生名簿」にも「山本錫太郎」「大韓民国京城音楽学校内」となっている。名簿に見る限り、山本は卒業後に帰国し音楽学校に勤めたと推測されるが、その後の消息にはたどり着いていない。今後は春川公立中学校長からの修了証明に残る「旧名 宋大錫」が手がかりとなろう。

#### (10) 宮本 英男 (1922- ?)

大正11(1922)年8月20日生まれ、本籍地は平安南道安州郡(現在の北朝鮮内)。昭和16(1941)年3月平安南道安州公立中学校卒業、同4月武蔵野音楽学校(現在の武蔵野音楽大学)予科入学、同年5月より藺田誠一につきコールユープンゲン第一編全部並びに第二編独逸語による発音練習、コンコーネ50番全部並びに25番中9番まで、発声法を学ぶ。昭和18(1943)年1月、ドイツ歌曲10数曲修業、小山郁之進にピアノ音階並びにツェルニー30番全部、ソナチネ数曲、ソナタ数曲、バッハインヴェンション3曲修業。昭和18年2月東京武蔵野音楽学校本科1年在学中。昭和18年4月東京音楽学校予科入学。声楽。『自昭和十三年度 予科入退隊学許可簿』に昭和18年12月1日「入営のため休学」と記載され、入隊した可能性が高いが、消息不詳である。『時間表 自昭和十八年十月 至昭和十九年三月』によれば、宮本は木下保門下である。応召休学により名前が赤鉛筆で消されている。この時期には木下保門下だけで担当学生の半数の12名が入隊休学した。ピアノは萩原英一門下。7ヶ月の学生生活に終わり、生還したかどうか不詳である。改名前の姓名の解明から今後につなげたい。

#### (11) 松方 正好 (1921 - ?)

入学願書によれば、大正10(1921)年9月5日生まれ。本籍地は朝鮮京畿道開城府大和町(現在の北朝鮮内)。昭和4(1929)年月開城松都小学校に入学、昭和11(1936)年3月に卒業し、4月開城松都中学校に入学、昭和16(1941)年3月卒業し、昭和17(1942)年4月京城東亜高工建築科入学、昭和17年9月同校中途退学、昭和18(1943)年4月東京音楽学校予科入学、クラリネット専攻。同年12月1日、入営のため休学し、昭和19(1944)年3月の学年末試験も「休学 兵役」である。『時間表 自昭和十八年十月 至昭和十九年三月』ではクラリネットが北爪利世門下であったが、休学のため名前が赤鉛筆で消されている。ピアノを外狩仲一に師事した。京城の高等工業学校建築科を7ヶ月で退学し、一年を準備に充て東京音楽学校に入学したが、学生生活はわずか7ヶ月で終わり、消息不明である。改名前の姓名の解明から今後につなげたい。

### 3. 朝鮮出身者の音楽学校時代と戦後についての考察

上述のように、11名の情報の多寡には大差がある。改名前の名前、インターネット上の情報、韓国側資料の記録の有無が鍵になる。現状で韓国側情報を十分に調査したとは言えないが、ある方々は韓国もしくは北朝鮮の戦後の音楽界を牽引する役割を果たしたことがわかる。日本語に習熟し、音楽を学ぶ環境にも能力にも恵まれた方々が朝鮮から東京音楽学校に入学した様子も窺える。日本人学生と同じように学び、対等な学友であり、むしろ信頼される存在であった。朝鮮に留まれば兵役に就かなかつたかもしれないが、日本の学校に学んでいいため入隊を志願し、日本人として戦おうとした（あるいは戦った）学生もいた。生還の有無すら不明の学生もいる。彼らの志や想いを推し測ることに限界はあるが、戦時下の東京音楽学校に学んだ朝鮮出身学生の足跡を追うなかで、彼らがひたむきに学び、生きた姿が浮かび上がってきた。信頼できる記録の蓄積が今後も重要と思われる。

#### 注

- 1 東京藝術大学音楽学部の始まりは明治12(1879)年の音楽取調掛創置に遡る。明治20(1887)年に官立専門学校の東京音楽学校となり、戦後の学制改革により昭和24(1949)年、東京美術学校とともに東京藝術大学へと改組された。
- 2 尾高暁子「音楽学校の中国人留学生」『近現代中国人留学生の諸相——「管理」と「交流」を中心に』大里浩秋、孫安石編著、御茶の水書房、2015
- 3 「植民地朝鮮における在朝鮮日本人の音楽活動—中等音楽教員・音楽家の活動からみた韓国西洋音楽受容史の一側面—」東京大学 2017.9
- 4 現時点では韓国国内および韓国側で把握可能な情報に限定される。
- 5 MEXT/JSPS KAKENHI Grant Number 16K03039
- 6 聴講科は「本科、研究科所定ノ学科目中一科目以内ヲ選修」でき、研究科修士生などが「聴講生」として在籍した。
- 7 昭和10年代の入学願書は概ね保存される。それ以前のは必ずしもそうではない。
- 8 朴の出演記録については、同書510、492、584、593、672、724頁参照。
- 9 「마이올리니스트 박민중」: [https://m.blog.naver.com//Post\\_View.nhn?blogId=kwank99&logNo=220044881962&proxyReferer=https%3A%2F%2Fwww.google.com%2F](https://m.blog.naver.com//Post_View.nhn?blogId=kwank99&logNo=220044881962&proxyReferer=https%3A%2F%2Fwww.google.com%2F)
- 10 『祝辞弔祭文案』（東京音楽学校時代の文書綴、大学史史料室所蔵）
- 11 『昭和十八年九月 山本元帥讃仰 演奏旅行収支計算書 東京音楽学校』参加者氏名、行程、演奏曲目、宿泊先などわかる。（大学史史料室所蔵）

- 12 【wiki】によれば梨花女子専門学校音楽科在職中の1945年に渡米たとされる。
- 13 たとえば尹の4年後輩で昭和17年に予科に入学した大石清氏（テューバ）も尹琦善を「いんきぜん」と発音し、優秀なピアニストとして記憶しておられた。
- 14 東京音楽学校の入学書類では「リ コセウ」とルビがふられている。
- 15 『自昭和十三年21年迄 甲師入退學許可簿 教務課』による。
- 16 キム・スンナム（1917~1986）：ソウル出身の作曲家。昭和13（1938）年東京高等音楽学院作曲部に入学、同15（1940）年東京帝国高等音楽学校器楽部のピアノ専攻に編入。昭和17（1942）年卒業し朝鮮へ帰国。1948年に北朝鮮に渡った。
- 17 ジョン・フンモ（1909~1978）：平壤出身。声楽家（ソプラノ）。東京高等音楽学院・帝国音楽学院卒業。1946年京城音楽学校講師を経て1953年ソウル大学校音大教授。
- 18 『東京芸術大学百年史 演奏会篇第二卷』東京芸術大学百年史編集委員会編、音楽之友社、1993年、690 - 699頁
- 19 東京音楽学校の入学願書には「キム コウシュ」とルビがふられている。
- 20 改姓の記録は入学願書および「注12」の『甲師入退學許可簿』による。
- 21 金興教（김흥교）の没年月日は、ソウル大学校中央図書館（<http://library.snu.ac.kr/>）および韓国民族文化大百科事典（<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0072384>）により1996年4月19日とした。

## **An Investigation of Tokyo Academy of Music during War Time: Focusing on the Circumstances of Students from the Korean Peninsula while Enrolled and after Graduation**

HASHIMOTO Kumiko

To better understand the reality of student life at Tokyo Academy of Music during the war, this paper aims to clarify the origins and circumstances surrounding students from the Korean Peninsula. Since 2015, this paper's author has collected and documented the lives, activities, and circumstances of those Japanese students who were called to military services while attending Tokyo Academy of Music. This research led to a new question: what was the situation for foreign students attending Tokyo Academy of Music? At that time, students from the Korean Peninsula, Republic of China (Mainland China), Manchuria, Taiwan, Siam (Thailand) were also studying at Tokyo Academy of Music. Through investigating this university's documents, as well as historical records from Korea, this paper focuses on the origins of students from the Korean Peninsula to illuminate the following: the goals of students while studying at Tokyo Academy of Music, the student life they experienced, if students were able to avoid the effects of the war or were affected by battle, and the activities they participated in post-war. Up to now, there has been little research on the documentation of students from the Korean Peninsula. However, I believe that analyzing the music activities of these students will reveal the history and relationship between both Japan and Korea during and after the war.

At that time, eleven students were enrolled at Tokyo Academy of Music from the Korean Peninsula. School records reveal that the enrolled Korean students, just like the Japanese students, studied, performed and went on performance tours while enhancing each other's future music activities. Before the war, these Korean students would return home; some becoming active within the Republic of Korea while one defected to North Korea for career promotion. Furthermore, another student studied at the Paris Conservatory and later worked in America. There are also students who contributed to military music. However, because these Korean students took on Japanese names while enrolled their activities after leaving Japan are mostly unknown because their real names are lost. Furthermore, the information on those who returned to North Korea does not exist in South Korea.

After losing the war, the relationship between Japan and Korea, as well as the state of the Korean Peninsula itself, changed. However, it is clear that these Korean students became the leaders of the musical scene in both North and South Korea because they took advantage of those things learned at Tokyo Academy of Music. Future research should investigate the relationship of education in Japan to more deeply understand the contents of activities and compositions after the war.